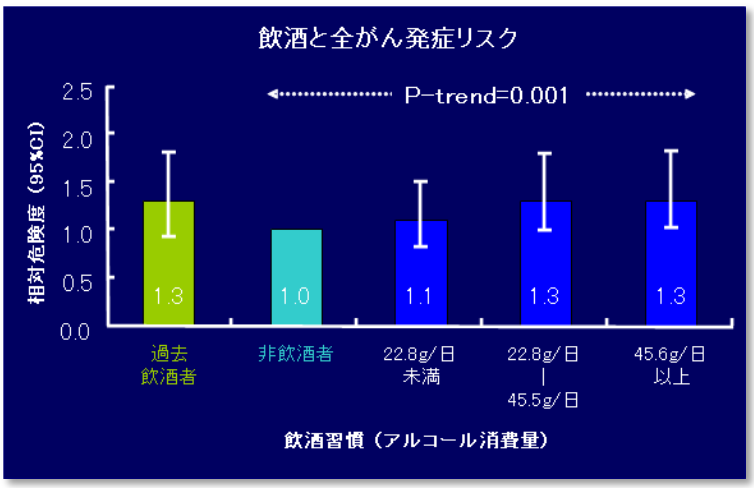
飲酒と全がん発症リスクの関連について：宮城県コホート

Alcohol consumption and the risk of cancer in Japanese men: the Miyagi cohort study.
2005 年　European Journal of Cancer Prevention 発表

飲酒によりがん発症リスクが上昇する

近年、大規模前向きコホート研究で飲酒によりがんのリスクが上昇するという報告があります。世界がん研究基金は、これまでの研究をまとめ、「確実」にがん発症リスクを高める部位を口腔・咽頭、食道、肝臓とし、「おそらく確実」にがん発症リスクを高める部位を結腸、食道、乳房がんとしています。しかし、日本人を対象にした飲酒とがんに関する研究数は未だ少ない現状です。
本研究では、日本の一般地域住民を対象とした大規模前向きコホート研究により、飲酒と全がん発症リスクの関連を検討するとともに飲酒習慣が人口集団全体においてどのくらいがんを発症させるのかを算出しました。本研究では、飲酒習慣のバリエーションが大きい男性のみについて検討を行いました。

その結果、非飲酒者に比べ現在飲酒者では、全がん発症リスクが上昇しました。さらに、飲酒量が増すほど全がん発症リスクが上昇しました。特に、アルコール消費量 45.6g 以上/日では、非飲酒者に比べ約 40％全がん発症リスクを上昇させることが示されました。また、がん部位 別にみると結腸・肝臓がんにおいて飲酒量が増すほど全がん発症リスクの上昇が示されました。さらに、人口集団全体のがん発症のうち 17.9％が飲酒習慣の影響によるものであることが示されました。



研究データについて

ベースライン調査：1990 年６月から８月に、宮城県内 14 町村在住の 40-64 歳のすべての男性２万５千人を対象に、生活習慣に関する自己記入式アンケートを配布し、２万 2836 人から有効回答を得ました。回答率は 92％です。
生活習慣に関する調査内容は、病気の既往歴と家族歴、体型、健診受診、女性の出産歴などに関することなどの健康状態、運動習慣、喫煙、飲酒、食事などの生活習慣、職業、婚姻状況、学歴、健康保険加入状況などの社会的な状況から構成されています。
追跡調査：飲酒に関連する質問への回答に不備のあった方 1243 人、ベースライン調査に答えていただいた方のうち、がんの既往歴のある方 392 人を分析の対象から外しました。ベースライン調査時から 1997 年 12 月 31 日までの追跡調査で、２万 1201 人の対象者のうち 882 人のがんが確認されました。

飲酒の摂取について（１日当たりのアルコール摂取量の換算）

アンケート調査では、まず、お酒を飲む、飲んだことがない、飲んでいたがやめた、という３つの選択肢からいずれかの回答を選んでいただきました。次に、飲む人には、どれくらいの頻度で飲むか、１日あたりの飲酒量はどれくらいかをお酒の種類別に尋ねました。日本酒１合は約 180ml で、アルコール消費量で 22.8ｇになります。本研究では、非飲酒者、過去飲酒者、現在飲酒者（アルコール消費量 22.8g 未満/日、22.8-45.6g 未満/日、45.6g 以上/日）に分類しました

研究の特徴と限界について

本研究では、飲酒が全がん発症リスクに与える影響を検討し、非飲酒者に比べ現在飲酒者では有意な全がん発症リスクの上昇を示しました。さらに、飲酒量が増すほど全がん発症リスクの上昇が示されました。特に、アルコール消費量 45.6g 以上/日では、非飲酒者に比べ約 40％全がん発症リスクが高いことが示されました。また、がん部位別にみると結腸がん・肝臓がんにおいて飲酒量が増すほど全がん発症リスクの上昇が示されました。

さらに、人口集団全体のがん発症のうち 17.9％が飲酒習慣の影響によるものであることが示されました。この結果から、飲酒を見直す取り組みを行うことにより約 20％の全がん発症を予防出来る可能性が示されました。
本研究の限界としては、自己回答によるデータを用いたため、必ずしも回答が実際と同じとは限らないのではないかとも考えられます。しかし、アンケートの回答による飲酒量は、実際の食事記録と関連していたという結果が得られていますので、それほど大きく外れているとは言えません。また、飲酒によるがんリスクを「確実」に上昇させるがん部位として、口腔・咽頭、喉頭、食道、肝臓が挙げられています。本研究では、それら部位の発症数が少ないため、飲酒との明確な関連を検定出来ませんでした。更なる追跡調査を行う必要があります。